深圳市及び広州外語外貿大学との文化交流報告

中国、広東省研修旅行団（文責　進藤賢一・張偉雄）

一、「深圳市特区文化研究中心」との交流会記録

一九九九年三月二四日、一九時三〇分から中華人民共和国広東省深圳市のホテルに於いて札幌大学文化学部関係者十一名と深圳市の「深圳市特区文化研究中心（研究所）」の主任研究員楊宏海（ヨーコーカイ）氏ら八名の文化交流のための会合があった。

札大側は夕食を済ませて交流会に臨んだので、「文化研究中心」側はビール、老酒、ジュースなど飲物を準備してくれた。

歓迎パーティーで、楊宏海（ヨーコーカイ）氏が次のような挨拶をした。通訳は張志東氏である。

深圳市の文化局長王京成（オー・キョーセー）は所用のため、少し遅れて来ます。

これまで、日本の都市と深圳との交流活動はいくつかありました。

一九九八年は日本の作家である村山先生が来て、日本と文化交流を行いたい、と表明されています。

村山さんは、深圳で見たり、聞いたりした文化施設などについて「人民中国」（日本向けの雑誌）に発表しています。

深圳には、日本の海部俊樹首相や池田大作先生がきて、おもに経済団体と交流し、二人とも深圳大学の名誉教授に推薦されました。

一九九七年には、朝日新聞の記者がこの地を取材し、新聞に記事がのりました。

深圳は、まだ若い都市でありますが、文化交流に強い関心をよせています。経済交流は、経済特別区になった時点から行われてきていますが、文化交流、文化研究は始まったばかりです。

深圳の街は、人口三万人の小さな南中国の農村地帯でありましたが、一八年後の今では、人口三八〇万人の大都市に膨れ上がっています。

深圳文化局のなかに文化センターができたのも一九九三年で、学問的な文化研究もまだ歴史が浅いわけです。

今日の研究目的は、経済と都市文化に関する研究があり、北京や上海の大学や研究機関から博士達がやってきて研究を進めています。今夜も二人の博士がこの交流会に出席しています。

著名な作家、ユー・チューユーはセンターの名誉会員であります。

オー・キョーセーも文化研究に参加しています。

センターに於ける研究の成果は、「深圳の歴史」と「深圳の歌集」、「文化深圳」として刊行されているので差し上げます。

文化研究やサラリーマン文化、民間文化などにも成果が現れてきています。
深圳は市場経済の実験場であります。
リゾート開発、観光地開発については「カキョージ」に特徴がでているし、大家楽（タージャーロ）は多くの庶民が集まる地域であります。この広場にはカラオケの設備もあります。
テレビなどの電気メーカーがあり、大企業の企業文化が支配しています。
我々は、「勝てば杯を持て、負ければ助け合おう」といったスローガンを日本企業から学んでいます。
誕生パーティーやダンスホールのなかにも研究対象としての文化があり、住宅団地にもあります。
深圳は移民の街です。若い人が多く住んでいて、それぞれ移民が持ち込んだ文化があります。
江沢民（コー・タクミン）も団地を視察しました。
遺跡や墓も文化研究の対象にしています。
一九九四年には、慶応大学の中原と言う学生が来て、墓の研究をしていきました。
移民の街で出稼ぎ者の多いことも特徴で、こうした材料を文学にした人もいます。「野麦峠」に似ているかもしれません。
世界から音楽家がきて、オペラなどの演奏も行われています。
外国からの留学生は一〇〇人を越え、日本からもきています。
そこで、交流についての提案があります。
一、移民移住の街という点では、深圳と札幌はよく似ていると思いますので相互の交流ができると思います。

二、日本のある街を選んで、深圳との比較文化研究をしたいと考えています。
三、文化研究家をつくりだすこと。
四、市場化とデジタル化のなかでの文化事業のありかたを考えたい。
以上であります。

上記の提案説明に関して札大側からも意見が述べられた。

石塚：「移民の街」というテーマでの比較文化研究には大変興味があります。

張：札幌と広州は雪と亜熱帯、日本の北と中国の南、これぞ異文化交流ができる素地がある。「優れたものを分かち合い、不足しているものを補う」交流が出来るはずです。

芸林：四〇年前、アメリカ合衆国から日本にきて初めて異文化に接した。文化の違いからくる疑いや偏見を消すことで、親しくなり平和に貢献できる。中国人留学生とはギョウザパーティーをやっている。札幌はいいところ、と彼らはいう。

八木（画家）：山口昌男先生に勧められて参加した。中国人は文化交流に熱心である。私は旗振りくらいしかできない。私の教授で雲南省の客家（ハッカ）の研究を行っている人がいます。したがって客家には興味があります。

長見（写真家）：山口先生に勧められた。二五年前、深圳、広州を訪れたことがありましたので、今日の変化を知りたかった。

進藤：交流はできるところからするべきで、あまり大風呂敷を広げないのが鉄則。相互訪問や資料交換から始めたらどうか。段取りがついたら共同調査も出来るでしょう。

討論のなかで次のような点が確認された。

研究テーマは①移民、移住問題　②街の近代化、現代化の社会的・文化的意味を捉える。

③「歴史」で始まる北京と「現代」から始まる都市、深圳との比較。

深圳はイギリスの祖借地九竜半島に接し、中国出入国の要地で農村を主体とした村であったが、一九八一年、アモイ、スワトウと並んで経済特別区に指定され、華僑資本や外国資本との合併企業が相次いで立地した。一九八四年の四三万人（市区一九万人）から、今日三八〇万人の大都市になった。これは札幌市の二倍である。

深圳の総面積は二〇二〇平方キロメートルであるが、経済特別区域は三二五．七平方キロメートルである。住民の平均年齢は二八歳、女性は全体の七〇％をしめる。

住宅購入費用は高く、3DKで五〇〇万円、4DKでは八〇〇万円程度になる。香港の住宅高の影響が陸地を伝播している感じである。

深圳市にはミニチャイナ、ミニワールドなどのテーマパークがある。この広大な施設は香港の財界と深圳の観光協会などが出費しているが、かなり巧妙にできた屋外展示施設である。

ミニチャイナは万里の長城、シルクロード、敦煌の石窟、ラサのポタラ宮、チャン族自治区の桂林、雲南省の石林やハッカ、シーサンパンナのタイ族の高床式住居、内モンゴルのゲル（パオ）、北京の天安門広場や紫禁城など中国の代表的な名所、旧跡、住居、建造物がミニ版で製作されている。

二、広州外語外貿大学東方言語文化学院との交流会（記録）

交流会は一九九九年三月二六日、午前一〇時から昼食を挟んで広州外語外貿大学東方言語文化学院の会議室で行われた。

出席者：中国側、院長（日本語学科）顧也力（コ・ヤリキ）、副教授巍育隣（エイ・ユ・リン）、副教授李東傑（リ・ドン・ジェ）の三氏、日本語学科四年生五人、一年生四人の合計一二人。

日本側出席者は張、ゲーリン、石塚、八木、長見、進藤など合計一一人

顧也力教授の挨拶と概要説明（日本語）

広州外語外貿大学は北京、上海、広州の三都市に配置されている全寮制国立の外国語教育重点校の一つでありましたが、いまは広東省立であります。中国における外国語教育の基地になっています。この大学は一九六五年の創立であります。

広州外語外貿大学は、経済、経営、法学、外語（英語＝西方、日本語＝東方）など七つの学院（学部）から成り立ち、学生数は約四、〇〇〇人。札幌大学に似た学部構成になっており、学生数も札幌大学の四年生学部に相当します。

張先生の出身大学であり、李東傑（リ・ドン・ジェ）副教授は張さんと同級生でありました。

国立大学のときの学費は無料でしたが、省立になってからは有料です。

一九九五年の制度改革では学部が改組され東方言語学院に、又、大学が省立になり学費が有料になりました。中国では、国立より省立、省立より市立のほうが大学に配分される予算は多いことになっています。地方大学の方が豊かです。広州市立大学は、私どもの大学より豊かで、直接アメリカ合衆国の大学と交流しています。

省立の先生は3LDK、国立は2LDKの住宅が与えられています。

七月中旬から八月いっぱいが夏休み、新年度は九月一日にはじまります。

白雲山（一八四m）の麓にある大学ですが湿度が高く、今日も九五％に達し、教室の床は水滴で滑りやすくなっているし、洗濯物もなかなか乾きません。

学院の内容をいいますと、東方文化学院のなかに、日本語、タイ語、ベトナム語、インドネシア語があり、西方にはロシア語、フランス語、スペイン語、ドイツ語、英語があります。

日本語は教員数二二名、学生数は日本語の本科生九〇名、社会人教育は最近需要が大きく、本科の二倍強にあたる二〇〇名程度が入ってきています。

教育内容は、一～二年生が言語の基本、三～四年生は日本文学、日本事情、日中貿易などをおこないます。

国際交流の面では、神戸女学院大学と姉妹校を締結し、一名の先生を派遣しています。

沖縄大学とも提携していますが、具体的内容での交流はまだ実現していません。留学生交換も希望していますが、現在のところ四、〇〇〇名の学生寮に余裕がありません。教授陣の交換のためのゲストハウスはあります。

学生達のスピーチ

リョー・ブンケー（東方言語文化学院四年男性）

いま、夏目漱石で卒業論文を書いています。日本文化の資料は少ないけれども、日本文学の資料は豊富であることから、こうしたテーマを選びました。

孫文先生の創設した中学に通っていました。日本人の観光客も多く、接触もできました。最初はやさしい日本語からはじめました。文化や言語に日本との共通性があるように思います。

日本語は英語よりやさしいと思っていましたが、敬語等が面倒です。日常語は大丈夫です。

漱石は中国でも人気があります。国際的普遍的文学思想からすれば、魯迅に似ていると思います。この学院では、二年生から漱石の「坊っちゃん」、「それから」などが教材として使われています。日本映画は面白い。狂気じみた作家がいます。芥川竜之介も後半は狂気になったように思います。三島由紀夫もそうでしょうか。

ここで日本の八木美穂子さんからコメント「狂気と客観性のバランスが芸術でありますから」

シン（蘇州出身四年生男性）

わざわざ札幌から来てくれて嬉しい。「友あり、遠方より来たり」の感じです。日本語を勉強しているのは、日本の友達と交流したいからです。日本の文学も学んでいます。四年も学んでいる割には日本語がうまくならない。これは男性のせいでしょうか。いくらか劣等感があります。日本文学は世界でも有名です。ノーベル賞の川端康成をテーマに勉強しています。日本文学には日本人独特の世界と欧米の優れた面を持ち合わせていると思いました。

ヨー（広東省出身四年生男性）

札幌大学と縁ができれば、留学したい。学費はいくらくらいですか。私は、文学より文法が好きです。「文法か

らみた日本語と中国語の違い」、「連体修飾語と英語」のテーマで勉強していますが、何故か面白い。卒論も文法でやっています。

よけいなことですが中華料理を上手につくることもできますよ。

シュー・レーキン（蘇州出身四年生女性）

作家になるのが夢です。この四年間はそのためにあります。中国語で作文をかいています。

四年生になると就職活動で忙しく、勉強がはかどりません。言語音痴ですから上海で養護の先生をやるかもしれません。

一年生のオー・カイナン（女性）、トウ・カシュン（女性）、オー・ヤン（女性）、バイ・ヨホー（女性）は自己紹介のみ。

昼食会での李東傑（リ・ドン・ジェ）副教授の話

中国の大学は、日本のように教授会がなく、教員の意見が人事や予算に反映できる権限がない。学長についても意見は述べることはできても、選挙で決めることはない。

共産党委員会の指示が大学に伝えられ、それが学院（学部）に伝達される。

教員の人事異動も全中国の範囲でおこなわれる。広州外語外貿大学も全中国から教員が来ている。

こうした権限の問題についても毛沢東時代からとう小平時代になって、ゆっくりした変化はみられる。

半生紀前、日本と中国はおなじ戦後の混乱期からスタートしたのに、何故こんなに経済力に差がついたのでしょ

うか。それは「主義」と「政治思想」にあります。

広州外語外貿大学の概要

広東外語外貿大学（Guang Dong University of Foreign Studies）は、一九六五年に設立された広州外国語学院を母体に、一九九五年に広州外貿学院を吸収、合併した形で、できた大学である。前身はそれぞれ「国家教育委員会」と「国家対外貿易経済合作部」に所属した、国立の大学であるが、合併後、広東省政府に所属を変え、地方公立の大学と変わった。

全学に教育機構として、七つの学部がある。（一、英語言語文化学院二、国際経済貿易学院三、国際商務管理学院四、西方言語文化学院五、東方言語文化学院六、国際文化交流学院七、成人教育学院）。ほかに、国際法学スクール、出国留学言語訓練センターがある。大学院としては、博士コース一つと、修士コース七つがある。

研究組織として、全学的に五つの研究所がある。（一、言語学と応用言語学研究所二、国際貿易研究所三、国際問題研究所四、国際言語文化研究所五、高等教育研究室）。ほかに、各学部に所属されている研究センターが一四ある。日本と関係のある研究センターとしては、東方言語学院に「日本学研究センター」が設立されている。

全学に教職員が、一、四〇〇名を擁している。中に教員としては、教授四〇名、助教授一六〇名、講師二一五名、外国人教師四〇名、助手も若干いるという構成である。広東外語外貿大学は外国研究を中心とした大学の性質もあって、国際交流の盛んな大学である。現在すでに世界各地二〇にのぼる大学と研究機関の間で交流協定を結び、定期的に交流を進めている。

（文責　進藤、張）